千葉大学教育学部研究紀要　第66巻　第１号　379～384頁（2017）

ヒトの成長発達と性行動の特徴から見た思春期の性の問題の理解と性教育における指導について

花　澤　　寿

千葉大学・教育学部養護教育

Understanding of problem of sexuality of adolescence from the viewpoint of human growth development and characteristics of human sexual behavior

HANAZAWA Hisashi
Faculty of Education, Chiba University, Japan

ヒトの成長発達及び性行動のもつ特異性とそれに由来する心理的側面への影響を検討することで，若年の性行動の問題点について考察した。ヒトの脳の発達の特徴として，衝動コントロールを担う前頭前野の成熟のかなり前に性的感情や衝動のたかまりが発現する。従来は，社会規範とその内面化により思春期の性衝動の行動化が抑制されていた。現代における社会規範の弱まりと，欲望を刺激する情報の爆発的な増加が，性行動の若年化をもたらした背景要因として考えられた。また，ヒトの性行動の持つ退行促進性が，個の確立が不十分な思春期においては健全な心理的発達を妨げる可能性を指摘した。衝動のコントロールの問題と，性行動によって促進された退行が，カップル間の暴力など，性に関連して生じる暴力的行為にも関与している可能性が考えられた。そして以上のような視点を，性教育の担い手である教員の養成教育に組み込んでいくことの有用性について検討した。

キーワード：思春期（adolescence）　性教育（sex education）　性行動（sexual behavior）　精神病理（psychopathology）

はじめに

近年，日本の若者の性行動の低年齢化が進行し，それにともなって様々な問題が生じている。若年の妊娠および妊娠中絶，性感染症の増加や，援助交際を典型とする少女による性的問題行動の他，近年注目されているカップル間の暴力や「リベンジポルノ」も，若者の性行動と密接な関係がある。

これらの問題の背景には日本の社会全体の変化がある。60年代以降進行した世界的な「性」の解放の流れや，それと並行して進行した価値観の多様化，相対化の中で進行した社会規範の緩み，バブル期の享楽的風潮やバブル崩壊後の拝金主義のなかで性の商品化が進行したことなどが挙げられるだろう。

一方で，そのような性行動の低年齢化および若者の性に関する心理的態度の変化に，学校における性教育は柔軟に対応できていない現実がある。ヒトの性にはタブーの側面があり，それを公に扱う際には社会的合意のもと慎重な態度が求められる。そのため，時代の変化のスピードにはついて行きにくい。また，性行動が社会的に認められるのは，公に生殖行動に入ることが認知された男女，すなわち既婚者に限られるべきと言う価値観も根強く残存している。結果として，若者が性行動を行うことを前提とした性教育に対しては一定の制限が課せられやすい。性教育を行う教員も，多かれ少なかれそのようなタブーや価値観の影響下にあるため，「性」を扱うこと自体に抵抗感を抱きやすい。結果として，児童思春期の子どもたちが「性」に出会い，性行動を経験していく上で，必要かつ正確な情報が子どもに届きにくく，また性に関連して問題が生じた時，大人からの支援や保護を受けにくい現状がある。

そのようなタブーや価値観の影響を免れ，性教育を冷静に，時代の変化にも対応しつつ行うことは，今後重要な教育的課題となるだろう。そのためのひとつの方策として，「性」の問題を文化的，慣習的な価値観から離れた学術的な視点で捉えることが有効である。生物としてのヒトの性行動の特徴，「性」と成長発達や心理状態とのかかわりを人類学，発達心理学，生物進化学などの視点から捉えることである。

本稿では，ヒトという生物の成長発達からみた性行動の特徴，また他の動物にはないヒト独自の性行動の特異性を検討することで，性行動が青少年の心理に与える影響について新たな視点から考察を試みる。そしてその視点を持って若者の性行動がもたらしうる問題点を検討し，その性教育への応用可能性について考察したい。

Ⅰ．性行動の低年齢化とそれに伴う問題について

１．性行動の低年齢化の実態

我が国において，社会情勢や社会的価値観の変化に伴い，近年性行動が若年化したことが指摘されている。日本の青少年の性行動や性意識の変化を全国規模で時系列

連絡先著者：花澤　寿　hanazawa@faculty.chiba-u.jp
Corresponding Author：
HANAZAWA Hisashi　hanazawa@faculty.chiba-u.jp

的に把握することができる資料として，日本性教育協会が，1974年からほぼ６年おきに行っている「青少年の性行動全国調査」がある。その第７回調査（2011年）までのデータを分析し，片瀬（2013）は「1990年代に入って，とくに高校生のデート･キス･性交経験，中学生のデート･キス経験を中心に経験率の大幅な上昇が見られた。その意味で，中学生・高校生を中心とした性行動の活発化が生じたのは，1990年代以降のことであると言えるだろう。」としている。また林は，1981年の第２回調査から2011年の第７回調査までのデータから，出生コーホート間で比較を行い，キス経験率，性交経験率とも1975－80年出生コーホートと1981－86年出生コーホートの間で大きな増加が見られたとしている。やはりほぼ1990年代に思春期を迎えた世代集団において，性行動の早期化傾向を示す結果である。また，性教育において特に重要な意味を持つ性交経験率の変化を同調査で1974年と2005年で比較すると，大学生男子（23％→61％），大学生女子（11％→61％），高校生男子（10％→27％），高校生女子（６％→30％）となっており，いずれにおいても，経験率は大きく上昇している。経験率の男女差が消滅したことも大きな特徴である（原，2007）。

90年代にみられた性行動の低年齢化と並行して，異性との交際における性行動の捉え方にも変化が見られている。すなわち，異性と「つきあう」ことが，性交を伴う関係に入ることととらえる若者が増加したのである。第７回青少年の性行動全国調査において，恋人がいる者について，相手と性交をするかしないかという質問に対する回答の時代による変化が分析されている（渡辺，2013）。大学生では，「恋人と性交をする」者の数を「恋人はいるが性交はしない」者の数を上回るのが男女とも1993年であり，高校生では男女とも1999年であった。90年代において，異性と交際することと相手と性交することの心理的な距離が近づいたことが示されていると言って良いだろう。

これら，90年代前後の日本の青少年の性行動の変化を要約して，原は日常化，早期化，男女差の消滅の三点に集約している（原，2007）。

２．性行動の低年齢化に伴う問題

性行動の低年齢化に伴い，従来から指摘されている社会的問題としては，若年妊娠および妊娠中絶の増加，若年層における性感染症患者の増加，性被害の問題，援助交際に代表される性の商品化や性非行の問題などが挙げられる。

また，より現代的な現象としてカップル間の暴力（カップル間DV，デートDV）の問題もある。従来夫婦間，つまり既婚者において問題とされていた，パートナーへの一方的で執拗な暴力（ドメスティックバイオレンス：DV）が，未婚のカップルの間で見られるようになったのである。DVの内容としては，殴る蹴るなどの身体的暴力，性行為の強要などの性的暴力，相手の交友関係のチェックや制限，人格否定的発言や暴言などの精神的暴力などが挙げられている。

第７回青少年の性行動全国調査（2011）の結果に基づき，羽渕（2013）により恋人からの暴力が検討されている。恋人からの暴力の被害内容と経験率は，男子の場合，高校生では友達づきあい干渉10.5％　精神的暴力9.6％　性的行為の強要1.2％　身体的暴力1.1％　大学生では友達づきあい干渉23.1％　精神的暴力18.2％　性的行為の強要2.4％　身体的暴力7.4％　女子の場合，高校生では友達づきあい干渉15.4％　精神的暴力15.2％　性的行為の強要10.6％　身体的暴力4.1％，大学生では友達づきあい干渉17.3％　精神的暴力21.4％　性的行為の強要12.6％　身体的暴力7.1％　であり，全体的に女子の方が被害率が高い。暴力が始まる時期にも特徴がみられる。第６回青少年の性行動全国調査（2005年）のデータを分析した土田（2007）は，交際の程度を「デートまで」「キスまで」「性交まで」の３段階に分け段階別に暴力被害経験率を分析し，「恋人からのDVについては，交際相手との性交経験後にさまざまな暴力が起こりやすいという特徴がみられた」と指摘している。特に被害者が女子の場合，デートからキスまではほとんど被害は増えず，性交経験までになると一気に６倍以上も被害が増加するという。このことから，恋人としての交際の段階で性交を伴うことが増えた近年の傾向が，カップル間暴力の増加の要因のひとつとして考えられる。かつては夫婦間に（少なくとも社会的には）限定して許されていた性交が，未婚の若いカップル間でも普通に行われるようになったことで，カップル間にもDVが現れるようになったと捉えることもできる。また，DVにみられるような，深い性的関係を持った異性への一方的で激しい攻撃性の突出という問題は，近年新たな問題として注目されている「リベンジポルノ」問題にも端的に現れている。リベンジポルノとは，恋人や配偶者と別れた腹いせに，交際中に撮影した相手の性的な画像や動画を相手の同意なしにインターネット等で公開し，拡散する行為であり，北米では2000年代後半から，日本では2010年代に入ってから社会問題化している（渡辺，2015）。

では，なぜ性交を伴う性行動が，このような問題を生じやすくするのであろうか？互いの同意のもと行われる性行動が，しばしば性教育で強調されるように愛情を確かめ，育む行為だとしたら，このような暴力の出現の意味を理解することは難しい。

なぜ，性行動の低年齢化が進行し，それに伴って相手への暴力など心理的問題が生じうるのか，ヒトという生物の成長と性行動の特徴と，現代社会の変化の相互関係の視点から，次項以降検討する。

Ⅱ．ヒトの成長発達の特徴と，性行動の低年齢化の問題

１．ヒトの成長発達の特徴から生じる現代的問題

他の哺乳類，そして霊長類と比較した場合，ヒトの成長発達のもつ顕著な特徴は，出生時の未熟性とその後の成長速度の遅さである（Bogin & Smith, 2000　長谷川，2015　Marks, 2015）。ヒトは進化の過程で身体全体と比較してきわめて大きな大脳を獲得したがゆえに，出生時に他の霊長類と同等の自律的能力を発揮できるまで脳が発達するのを待っていると，母親の産道を通らなくなってしまったのだと考えられている（Trevathan, 1987）。

そのため，人類は，「胎児が独立して生きられる最低限度まで妊娠期間を短縮し，子宮外に出てから脳の成長を完了する」（Dunber, 2014）という特殊な出産，成長パターンを進化の過程で選択した。その結果，ヒトの赤ちゃんは他の哺乳類と比較して出生時の身体的発達が格段に未熟であり，親による絶対的な保護・養育を要することとなったのである。未熟な段階で生まれ，その後も成長を続けるヒトの脳は，環境からの様々な情報の入力を得，それに反応し，試行錯誤を重ねながら，生きていくのに必要な多様な能力を獲得していく。つまり，ヒトは，生きる能力を獲得するにあたって，他の哺乳類に比べ，圧倒的に本能よりも学習に多くを依存することとなる。この学習には多くの時間が必要であり，所属する社会において一人前になるまでヒトの子どもは親の保護を受け続けることとなる。ヒトの身体の発達が一応の完成を見るまでに，約20年の時間が必要である（Bogin & Smith, 2000）。脳については，さらに成熟までに時間を要することが近年の研究で明らかになってきている。特に，思考や創造性を担う脳の最高中枢であると考えられている前頭前野は，系統発生的にヒトにおいて最もよく発達している脳領域であるとともに，個体発生的にも最も遅くまで髄鞘化やシナプスの刈り込みなどの成熟過程が生じる部位であるとされている（渡邊，2013）。この前頭前野の発達は，10代後半以降に加速し，成熟するにはそこから10年前後の時間を要するという（Strauch, 2003　Johnson, Blum & Giedd, 2009）。そして，この前頭前野の主要な機能の一つが，行動に伴うリスクを推し量り，衝動や欲求をコントロールすることである。一方，二次性徴は，脳と身体の成長が完成する以前，思春期の始まりとともに10代の前半に現れる。そして異性への性的関心や性的衝動がたかまるとともに，生殖能力が獲得される。つまり，ヒトにおいては，脳を含めた身体的発達の完成の数年前に生殖能力が獲得されることになる（Bogin & Smith, 2000）。

我々の祖先が狩猟採集によって生きていた時代においては，このことは大きな問題を生じなかっただろう。その時代，人類は血縁者を中心とした小規模な集団生活を送っており，子どもは両親，祖父母その他近親者による共同育児（alloparenting, cooperative breeding）が基本であったと考えられている（長谷川，2015　Hrdy, 2011 Marks, 2015）。10代半ばで生殖活動に入り子どもをもうけても，育児の責任が思春期の男女のみに負わされることはなく，むしろ早い年齢で生殖活動に入ることは，より多く子孫を残しうるという点で適応的であったと考えることもできる。

ところが現代では大きく事情が異なる。特に産業革命後の近代社会においては，個人は何らかの形の労働によって所属する社会に貢献することが当然のこととして期待されるようになった。そのためには，成長過程において膨大な量の知識と，社会的価値観のとりいれ，そして経験の蓄積が必要である。そのような過程を経て現代の子どもはようやく社会的に一人前の存在，つまり大人と認められることとなる。近代以降における学校は，そのような大人の養成機関という側面を強く持っている（伊東，2008）。また，育児の形態も大きく変わった。都市化の進行とともに素朴な共同体は解体され，核家族が基本となり，育児は夫婦，特に母親が多くの労力を費やして行うものとなった。このような時代においても，生物としてのヒトの思春期には二次性徴が現れ，生殖能力が獲得される。しかし現代の思春期は，未だ大人からの多大な保護を要する時期であるとともに，将来社会人として自立するための多くの課題をこなさなければならない準備期間である。したがって，生殖活動に入ることは社会的に強く抑制されるし，当人達も子どもが欲しいとはほとんどの場合思わない。

それでも，現代においては思春期年代における性行動が増加している現実がある。その理由はどう考えれば良いだろうか？

ここでは，大きく２つの要因を指摘したい。

ひとつは，「性」に関する社会規範の弱まりである。ヒトの性行動は，本来生殖と切り離された意味を持っている。そもそもヒトの性欲・性衝動は，直接的に「子孫が欲しい」という欲望・衝動ではない。（異性愛者の場合）異性を性的に求め，性行動をしたいという欲望・衝動である。思春期は，本能に由来する性衝動が発現する一方で，それを抑制する前頭前野を中心とする脳機構はいまだ成熟途中という時期であり，従来主として社会規範とその取り込みによる抑制・抑圧が，性行動に歯止めをかけてきた。したがって，社会規範そのものが緩めば，思春期の性行動が増加傾向を示すことは自然である。

ふたつめは，性的関心や衝動を高める刺激量の圧倒的な増大である。「性」を題材とする雑誌や小説，マンガなどから始まり，現代ではインターネットの発達によって，以前なら大人による検閲を受けていたような性的情報や性的画像・動画等による刺激が，事実上無制限に子ども達に直接注ぎ込まれるようになった。無論ネット上にも性に関する正しい，教育的な内容も数多く存在する。しかし，子どもたちが検索し，あるいはネットサーフィンをするなかでアクセスする性に関連した情報のほとんどは，ただ性的好奇心と欲望を刺激するものであるか，「出会い系サイト」のように他者との性的なつながりの可能性を高めるものである。

以上をまとめると，ヒトの成長発達の本来の特徴である思春期における前頭皮質機能の未熟性，従来性行動を外から抑制してきた社会規範の弱まり，性的衝動を高める刺激量の圧倒的増大，少なくともこれらの要因は，我が国における性行動の低年齢化に関与していると言って良いだろう。

２．ヒトの性行動のもつ退行親和性から生じうる問題

ヒトの性行動の大きな特徴は，それが生殖と切り離して成立するという点である。ほとんどの哺乳動物のメスは，さまざまな目立つシグナルを発することで，排卵時期を知らせ（発情）それにオスが反応することで頻繁な交尾がその時期にほぼ限定して行われる（発情期）。ところが，ヒトは進化の過程でそのような意味での発情および発情期を失った（山極，2012）。つまりメスの排卵とはほぼ無関係に，いつでも性衝動を抱き性行動を行えるようになったのである。そして生殖以外のさまざまな意味や目的をヒトの性行動は持つようになった。すなわ

ち，快楽の追求，愛情の確認あるいは愛情を強め合うなどの濃厚なコミュニケーション，お金やサービスを相手から得るための手段などである（榎本，1997）。

現代の若年のカップルの性行動は，ほとんどの場合生殖のためという目的を持たず，主に快楽と濃厚なコミュニケーションの希求という意味を持っている。人と人との関係において，互いの愛情を確認し，強め合うことは，本来はむしろ望ましいことである。確かに，性行動によって性感染症感染の危険は高まるし，望まない妊娠は大きな問題である。では，性感染症の予防と避妊行動さえ確実に行われれば，若年の性行動に大きな問題はないのだろうか。この点を検討しておくことは，現代の性教育を考える際，重要な課題であろう。

ここで，ヒトの性行動の持つもう一つの特徴について考える必要がある。それは，ヒトの性行動に見られる退行的要素である。退行とは，ある時点において，それまでに発達した状態や機能あるいは体制が，それ以前のより低次の状態や機能ないし体制に逆戻りすることをさす心理学的概念である（小此木，2001）。つまり，その時点で獲得している心理的，社会的発達段階よりも過去の，より幼い状態へと戻ることを指す。いわゆる「子ども返り」のことである。

他の哺乳動物と異なり，人間の性行動の様式には退行と強く関連する特徴がある（Bromhall, 2003）。主に対面で裸で抱き合うこと，肌と肌のふれあいや愛撫が重要な要素であること，本来生殖とは無関係な口唇と女性の乳房が大きな意味を持つこと，などである。生殖のためであれば必要充分なペニスの挿入と射精という行為以外の，このような多様な様式に，母と乳児の関係の反復，再演（Bromhall, 2003）という意味を読み取ることができる。肌と肌との触れあい，抱擁は，乳児が母親との間に安心感や一体感，愛情を感じるための最も基本的な行為である。授乳時，口唇がやわらかい乳房に接触し，乳を吸うことで乳児にうまれる安全感と絆の感覚が，後の性的接触における口唇の役割と乳房への執着に繋がっている（Bromhall, 2003）。口唇と口唇（および舌と口腔粘膜）の接触によって快感を得る行為であるキスについても同様の起源が想定される（Kirshenbaum, 2011）。なお，キスについては，その起源を母親の乳児に対する離乳行為にみる説もある。現代のように離乳食など存在しなかった過去においては，離乳期，母親が自らかみ砕いて柔らかくした食物を乳児に口移しで与えていた。そのため，唇の接触が快楽や愛情と結びついたというのである（Morris, 1985　Bromhall, 2003）。

以上から，人間の性行動は，乳児が依存対象である母親に向ける欲求充足や一体感，愛情の希求，すなわち「甘え」（土居，1971）と密接に結びついていると考えることができる（Bromhall, 2003）。もちろんそこに，母親対乳児に見られるような立場の非対称性は（それほど強くは）認められない。濃厚な二者関係のなか，性行動に関わる両者が，一時的に退行し，互いに「甘え合う」ことで，愛情と快楽を希求する行為と言えるだろう。

退行は，「子ども返り」であるから，大人としての社会生活とは基本的には相容れない。ヒトの性行動が，多くの場合夜二人だけで行われることも，当然といえば当然であるが，日中の社会生活における大人としての役割，ペルソナから離れ，退行しあうために必要な舞台設定と考えることもできる。人間の「性」にタブーがつきまとうことも，性行動における二者間の退行的関係が，基本的に三者関係で成り立つ社会性とは相容れないことがそのひとつの要因と言えるだろう。

「個」としての自立を達成しているおとなの場合，夜，私的な時間においてパートナーとの間で性交を通して退行しても，朝になれば再び社会的ペルソナをもって大人としての日常生活を送ることができる。そこでの性行為に伴う退行は，パートナーとの愛情を確認し，高める手段としても，社会的場面で蓄積するストレスを解消する心理的防衛としても有効に機能する一時的な心理状態である。このような退行を，精神分析学者のE.Krisは「自我による自我のための一時的･部分的退行」と呼び病的退行と区別した（小此木，2001）。つまり自我を確立し，「個」としての自立を達成している大人であれば，性行為によって退行が固定化する危険性は少ない。

しかし，若年者の場合必ずしもそうはいかない。そもそも思春期とは，自我を確立し，社会的に自立するという発達課題を達成する途中の過程である。つまり，「個」の確立はいまだ不十分であり，そのような若者が性行為によって退行した場合，それが一時的なものにとどまらず健全な発達が阻害される可能性を考える必要がある。特に，それまでの発達過程において，保護者への必要充分な甘えとそれを前提とした自立への準備という発達課題の達成が不十分な場合，性交渉により退行し，相手に未熟な依存を向ける可能性がある。そうなると，社会的場面では年齢相応の適応が保たれていても，性的関係にある相手に対しては，適切な距離をもった対等な関係をむすぶことはもはやできず，退行，依存が進行していくこととなる。この場合の依存とは，相手に対する従属的な依存ではなく，自らの欲求充足を当然のこととして期待する（乳児が母親に向けるような）支配的な依存となるだろう。そのような場合，相手に対する自分の欲求や期待が満たされないと，欲求不満状態の乳幼児が母親に向けるような怒りを相手に抱き，それをコントロールすることもできず，直接的な暴力行為に及ぶことが起こりうる。前述の通り暴力的衝動のコントロール能力は思春期の脳においては未完成であるし，退行していればなおさら難しいこととなる。

ただし，自らの暴力で依存対象である相手が弱ってしまうことは，加害者にとって本来望ましいことではない。相手が弱ってしまっては依存することができないからである。また，暴力の結果相手が自分の元を去ってしまう不安にもさいなまれることになる。そのため，多くの場合，暴力の後は一転して加害者は相手に優しく接し，関係の途絶を避けようとする。また，そもそも２者の相互的な依存関係が形成されているため，被害者側も決然と関係を絶つことが難しい。暴力によりすくんでしまい，逃げるという選択肢がとれなくなることもあるだろう。そして相手が離れる危険が避けられると，加害者は再び些細な欲求不満から暴力を爆発させることになる。そして以下同じパターンが繰り返される。

カップル間の暴力の心理機制の少なくとも一部は以上

のように説明することが可能であろう。このように考えると，カップル間の暴力が，相手との性交経験後に増加することも理解できる。また，別れたあとも相手に執拗な怒りを持ち続け復讐しようとするリベンジポルノの心理機制にも，同様に，性的関係の深まりによる（病的）退行の進行，相手への未熟な依存の形成，欲求が満たされないことへの激しい怒りの突出，というメカニズムを想定することができるだろう。

性の規範が強固だった時代，若者は親から心理的にも自立し，適切な三者関係を持てる自立した「個」となった上で「性」の世界と出会っていった。そもそも結婚とは，若者にその資格があることを認める社会的制度であったとも言えるだろう。そのような環境のもとであれば，本来性行動の深まりは，成長の過程における前進，進歩を意味し，「通過儀礼」としての意味も持っていた。しかし，そのような規範や制度が曖昧化した現代においては，ヒトの性行動の持つ特徴は，心理的成長過程にある若者を逆に退歩させうることに留意すべきではないだろうか。

Ⅲ．性教育の課題にどう生かすか

最後に，以上の論考を，実際の学校における「性教育」のもつ課題に対して，どう活かしうるかを検討する。

ヒトの性衝動は本能によって生じる。しかし，実際の性行動を行うには学習が必須である。かつて遠い過去の時代においては，両親の性行動の模倣による学習でことたりていたのかもしれない。しかし，現代社会においては，性行動は日常の社会生活，社会的かかわりから切り離されている。したがって，なんらかの形での「性教育」は，思春期の子が健全な性行動を身につけていくにあたって必須のものとなる。その「性教育」の担い手は，ほぼ保護者と学校（を中心とした公的教育活動）に限られる。しかし，ほとんどの保護者が当たり前のように行える，あるいは行っている一般的かつ適切な性教育の方法論は現代の日本には存在していない。したがって，このことだけから考えても学校における性教育の存在意義はきわめて大きいことになる。

その学校における性教育であるが，現在の我が国では，「性教育」という科目を設定するのではなく，各教科の時間や生徒指導など学校教育全体を通じて行われるものとされている（広瀬，1997）。つまり，性教育専門の教員が存在するわけではなく，少なくとも理念的にはすべての教員が，その教育活動の中で性教育に関わることになる。この方式には，児童生徒が日常生活の中で様々に呈しうる性に関連した悩みや問題にきめ細やかに対応しうるという利点もあるだろう。しかしその前提として，すべての教員が，性教育の担い手としての自覚とともに，正しい「性」に関する知識を持ち，それを教育するときに必要な繊細な配慮を行えることが求められる。

ところが実際はどうであろうか。そもそも「性教育」という科目が存在しないため，現在の大学における教職課程の中には性教育という項目は特別に立てられていない。たしかに学習指導要領で，教えるべき性教育の範囲，内容は定められてはいる。しかし，価値観の相対化や流動化，混乱の中で，どこまで子どもたちに「性」を教えるのが適切かという社会的コンセンサスは，必ずしも得られていない。また「性」は社会的タブーの側面を持っており，教員が「性」を語る際一定の抵抗感を抱くことは免れない。結果として，個々の教員の「性教育」に対する態度や考え方を統一することは難しい。実際のところ，一般の教員に，自らの職務のひとつに「性教育」があると意識しているものはほとんどいないのではないだろうか。養護教諭を中心に保健体育の範囲で限定された内容で行われているのが現状といっていいだろう。つまり，すべての教員に性教育が可能なレベルの知識・経験，配慮や動機づけがあるとは言いがたい現状がある。

このような現状で，たとえば生徒に対し，若年における性行動の抑制の必要性を説かねばならない事態が生じたとき，自信を持って指導できる教員は多くないのではないだろうか。かつてであれば「だめなものはだめ」という単純な禁止でことたりていたかもしれない。しかし，学校や教員の持つ権威性が低下し，性に関する社会規範の緩みが子どもたちの目から見ても明らかな現代においては，このような対応では多くの効果は期待できないだろう。

また，性教育でしばしば強調されるようにヒトの性行動が愛情に基づき，愛情を育てる行動だというのなら，なぜ思春期にそれが許されないのか，というある意味当然の子ども側からの疑問に答えることもできない。それ以外にも，性に関する問題行動，カップル間暴力やリベンジポルノといった現代的問題が生じたとき，教育の立場から適切な対応をとることが難しいだろう。

このような状況を改善するためのひとつの方策として，大学の教職課程における「性教育」教育の充実があげられるだろう。そしてその際，指導要領に基づく性教育に関する知識や方法論の学習とともに，本稿で検討したようなヒトの性をみる視点を学習に加えていくことが有効と考える。すなわち，性に関する社会的価値観やタブーからいったん離れ，ヒトという生物の成長発達の特徴，性行動の持つ特異性や心理的発達への影響を科学的に理解し，その上で，現代社会の構造や特徴，子どもたちがおかれている環境が，性に対する態度や性行動などにどう影響しているかを考えることである。若年における性行動が，社会規範や道徳の側面からのみではなく，当の児童生徒の心理的発達に大きな影響を及ぼすことを理解していれば，児童生徒の発達段階に応じて適切な性行動を指導する際により説得力を持ちうる。性に関する問題行動やカップル間暴力の問題も，性非行や加害者側の心理的問題という側面からだけでなく，ヒトの性行動が，青少年の心理や発達にどのような影響を与えうるかという視点も含めて理解，指導できることが望ましいだろう。

おわりに

従来，学校における性教育の現場ではほとんど注目されてこなかった，ヒトの成長発達及び性行動のもつ特異性とそれに由来する心理的側面への影響を検討することで，若年の性行動の問題点について新たな視点から考察することを試みた。ヒトの脳の発達の特徴として，衝動

コントロールを担う前頭前野の成熟のかなり前に二次性徴が始まり，性衝動のたかまりや性的要素を含む対象への愛情が発現する。従来人間社会は，社会規範とその内面化により思春期の性衝動の行動化を抑制していたが，現代においては性に関する社会規範が弱まり，むしろ衝動を刺激する情報が圧倒的に増えていることが，性行動の若年化の大きな要因と考えられた。また，ヒトの性行動には，退行を促進する性質があり，個の確立が不十分な思春期においては，性行動による退行が健全な心理的発達を妨げうる。衝動のコントロールの問題と，性行動によって促進された退行が，カップル間の暴力やリベンジポルノなど交際相手への支配的暴力の突出を生んでいる可能性が考えられた。

性行動の若年化にはこの数年歯止めがかかったとの指摘はある。草食（系）男子という言葉が流行したのは2009年であるし，第７回青少年の性行動全国調査でも，それ以前の調査に比べ若者の性行動の減少と性に対する消極化傾向が指摘されている（片瀬，2013　渡辺，2013）。しかしながら，価値観の多様化，相対化という，世界的に進行する大きな流れの中で，社会規範がゆるむとともに，ネット社会の発達により欲望や衝動をあおる刺激が子どもたちに直接流れ込むようになった現代社会の現実はもはや留めようはない。このような社会環境の中，心理的発達段階から考えると早すぎる性行動にはしり，その結果深刻な関係性の問題，心理的発達上の問題を生じる子どもたちは今後も一定の割合で存在し続けることに変わりはないだろう。

このような時代に子どもたちを導く「性教育」には，社会全体の動きの把握とともに，ヒトの心理発達と性行動の特徴に関する基本的な知識が求められるだろう。

文　献

Blakemore, S.J., Frith, U.（2005）The Learning Brain: Lessons for Education Wiley.（S.J.ブレイクモア，U.フリス著　乾敏郎，山下博志，吉田千里訳　脳の学習力 子育てと教育へのアドバイス．岩波書店．2006）

Bogin, B., Smith, B.H.（2000）Evolution of the human life cycle. Human biology: An Evolutionary and Biocultural Approach. Wiley-Liss.

Bromhall, C.（2003）The Eternal Child. An Explosive New Theory of Human Origin and Behavior. Ebury Press.（クライブ･ブロムホール著　塩原通緒訳　幼児化するヒト 「永遠の子供」進化論．河出書房新社．2005）

土井健郎（1971）「甘え」の構造．弘文堂．

Dunber, R.（2014）Human Evolution. Penguin Books Ltd. London.（ロビン・ダンバー著　鍛原多恵子訳 人類進化の謎を解き明かす．インターシフト．2016.）

榎本知郎（1997）サルの性から，人間の結婚へ．大庭健，鐘ヶ江晴彦，長谷川真理子等編　シリーズ性を問う３ 共同態．専修大学出版局．

羽渕一代（2013）現代日本の若者の性的被害と恋人からの暴力．日本性教育協会編「若者の性」白書　第７回青少年の性行動全国調査報告書．小学館．

長谷川真理子（2015）思春期はなぜあるのか―人類進化学からの視点．長谷川寿一監修　思春期学．東京大学出版会．

原純輔（2007）「青少年の性行動全国調査」とその30年．日本性教育協会編「若者の性」白書　第６回青少年の性行動全国調査報告書．小学館．

広瀬裕子（1997）性教育の機能と効果　社会の枠組みの維持と再生産．大庭健，鐘ヶ江晴彦，長谷川真理子等編　シリーズ性を問う２　性差．専修大学出版局．

Hrdy, S.B.（2011）Mothers and Others: The Evolutionary Origins of Mutual Understanding. The Belknap Press.

伊東美登里（2008）現代人と時間　―もう〈みんな一緒〉ではいられない．学文社．東京．2008.

Johnson, S.B., Blum, R.W., Giedd, J.N.（2009）Adolescent Maturity and the Brain: The Promise and Pitfalls of Neuroscience Research in Adolescent Health Policy. J Adolesc Health. 45(3) 216-221.

片瀬一男（2013）第７回「青少年の性行動全国調査」の概要．日本性教育協会編「若者の性」白書　第７回青少年の性行動全国調査報告書．小学館．

小此木啓吾（2001）「退行」加藤正明ら編　縮刷版精神医学事典．弘文堂．

Kirshenbaum, S.（2011）The Science of Kissing: What Our Lips Are Telling Us. Grand Central Publishing.（シェリル･カーシェンバウム著　沼尻由紀子訳　なぜ人はキスをするのか？　河出書房新社．2011）

Marks, J.（2015）Tales of the Ex-Apes: How We Think about Human Evolution. University of California Press.（ジョナサン・マークス著　長野敬，長野郁訳 元サルの物語．青土社．2016）

Morris, D.（1985）Body Watching. Equinox（Oxford）Ltd.（デズモンド・モリス著　藤田統訳　ボディウォッチング．小学館．1992）

Strauch, B.（2003）The Primal Teen: What the New Discoveries about the Teenage Brain Tell Us about Our Kids. Anchor.（バーバラ・ストローチ著　藤井留美訳　子どもの脳はこんなにたいへん！　早川書房．2004）

Trevathan, W.R.（1987）Human Birth. An Evolutionary Perspective. Routledge.

土田陽子（2007）青少年の性的被害と恋人からDV被害の現状と特徴．日本性教育協会編「若者の性」白書 第６回青少年の性行動全国調査報告書．小学館．

渡辺裕子（2013）消極化する高校生・大学生の性行動と結婚意識．日本性教育協会編「若者の性」白書　第７回青少年の性行動全国調査報告書．小学館．

渡辺真由子（2015）リベンジポルノ―性を拡散される若者たち．弘文堂．

渡邊正孝（2013）前頭前野．脳科学辞典．https://bsd.neuroinf.jp/wiki/前頭前野

山極寿一（2012）家族進化論．東京大学出版会．